

2018年3月27日~3月28日

玉井 満代

聖美・優妃

3月27日 シャン州サティ村にて、保育園の開所式に参加。

午前6時30分 ヤンゴンのホテルから空港へ。

午前9時 シャン州のヘーホー空港到着。チャーターしたバスでガイド兼通訳のピューさんとともにサティ村に向かう。空港からしばらくは道も舗装され、両側にもレンガづくりの民家やバイクに乗る人々が散見されたが、2時間後くらいから荒野になる。道も荒れ気味ななか、予定を1時間押し、3時間かけて村に到着。

午後0時~ 村人たちはスマートフォンで撮影したり、手を振ったりして歓迎してくれた。学校の中にカットしたフルーツやスコーン、サラダのようなものが用意されていた。ガイドのピューさんになまものは日本人には危険だから食べないようにと言われ、スコーンのみいただく。日本人の口にも合うスコーンだった。同じテーブルにはその学校に赴任してきた先生（女性）、隣村の私立学校の英語の先生（男性）がいらした。二人とも英語が話せるため、説明役も兼ねて同席してくれた模様。



村の大勢の人がスマートフォンを持っていたが、インターネットや電気は通っておらず、限られた場所で発電機を使って発電しているらしい。充電は主にソーラーで、スマートフォンの使用用途は写真撮影や音楽とのこと。

学校のトイレはかなり衛生状況が悪い。日本の和式便所のような便器で、使用後は横の溝のようところに溜めてある水を取っ手付きの風呂桶のようなもので流す。水も淀んでいた。

午後2時半~ 村人たちが両側に並び、音楽を奏でたりして歓迎してくれる中を歩いて保育園に向かった。保育園の中を見学。寄付者の玉井満代の写真が飾られていた。机や椅子は揃ってはいないがいくつかあり、これから集めるらしい。村で一番きれいなトイレを設置できた、と紹介してもらった。



午後2時50分~ 開所式スタート。保育園横にテントを張り椅子を並べた開所式の会場ができていた。村人たちが集まって座っていた。

JAMAHAの近藤理事長、玉井がスピーチ。社会福祉長、教育長、パオ族の代表、村長がスピーチ。教育施設が建てられたときは、必ず政府から定められた、地区ごとの教育長や社会福祉長が参加しなければならないらしい。(ピューさん談)



パオ族はつい 20 年ほど前まで、ミャンマー政府と内戦を繰り返していたが、今は武器を捨て、多民族国家ミャンマーの発展に尽くしているという話しが特に興味深かった。テレビや書籍、インターネットで世界の紛争を知ることは可能な現代でも、当事者たちの声を生で聞く機会はなかなかないものということに気付かされた。

ピアノ 2 台、12 色色鉛筆 24 セット、お菓子などを寄贈。

開所式後、村の先生たちを集めてそろばんの授業を行った。大きな教師用そろばん 1 丁、23 桁そろばんを 25 丁持っていったが、一人 1 台にはまだ足りなかった。先生方はかなり意欲的で、初めてそろばんを見て、そろばんが何かもわからないにもかかわらず、10 までの数の足し引きを短い時間でマスターした。そろばん全てとテキストを寄贈し、次回訪問するまでにテキストを勉強してもらうことを玉井と約束。皆笑顔で約束してくれた。建物を寄贈するだけでなく、自立のための教育支援するにはどうすればよいのか考え続けたい。



ヘーホー空港からヤンゴンの空港へ戻る。飛行機が自由席というまさかな体験。小さな空港の建物から歩いて飛行機まで向かい、列に並んだ。



3 月 28 日 孤児院の訪問。

午前中 寺院が経営する女子専門孤児院 (Buddha Date School) を訪問。数年前に栃木の僧侶の方が建物を寄贈してくださったそう。衛生的なトイレは歌手の一青窈さんが寄贈してくださったと自慢していた。トイレの衛生面はやはり重要事項なのかもしれない。

昨年日本人の方のボランティアで裁縫を習ったそうで、作品を見せてもらった。ショルダーバッグやポーチ、手提げ袋が、思い思いの布で作られていた。とてもかわいいので数点購入。最初、寺院の人は子どもたちの作ったものだしあげると言ってくださったが、かなり安い値段ではあるが購入させてもらった。

自分の作品が「商品」になると実感することは自信にもなるし、手に職をつけることに意欲的になるはずだ。これも一種の支援になると信じたい。

午後 日本人の方が始めたという ヤンゴン市内の“Dream Train” を訪問。男女数百名が暮らすこの孤児院は、日本の看護師の方が 2 年派遣され、子どもたちと暮らしている。事務室のような場所にはさまざまな日系企業の訪問予定や、日本人からの手紙、写真が見られた。

女の子たちによるチアリーディングの練習を見学。翌日の大会応援のためだとか。日本人のチアリーディング経験者の方が笛を吹いてタイミングを計り、かなり本格的。

派遣された日本人看護師の方に話を伺うと、悩みは卒業後の就職や進学だそう。希望すれば塾のような施設に通うこともできる(?)が、実際の大学進学率は悪い。町の学校だけでは到底足りないらしい。また、大学進学できなかった子たちの就職先にも不安がある。孤児院を卒業しなければならないが、故郷の村に帰るか、施設に近い就職先が望ましいのだとか。卒業後も連絡を取ったり、何かあれば手助けするなど手厚くサポートがあるようだ。

